

展示・収蔵品より

美を知る 318

昨年度、当館に寄贈された「色絵花卉文唐人絵皿」(写真1)は、色絵楽焼の優品である。褐色の胎土には白化粧が施され、その上に朱や藍、黄の絵の具で伸びやかに唐人や動植物が描かれている。作者は長康亭道三(1801年〜没年不詳)である。「長康亭」の他にも「寿楽軒」「尾形」「秋田」など複数の号を用いた。

長康亭道三の絵皿

絵付けに優れた名工

楽焼とは、800度前後の低温で焼いた軟質の陶器をいう。道三は江戸末期から明治期にかけて秋田で作陶し、磁器の染付や色絵の陶器・楽焼など、優れた作品を残した。特に絵付けに優れ、その作風は彩色豊かな南画風のものも多く、花鳥や山水、唐人などを繊細に描いた(写真2)。仙北市の白岩焼のように、日常品として大量生産される焼き物が主流だった秋田において、絵付けに重点を置いた道

三の作風は際立っていた。個人作家として自由な表現を貫いた道三は、当時珍しい存在であったと言える。道三の経歴には不明な点が多く、現存する作品は少ない。そのため、好事家の間では幻

の名工とされる。秋田の陶芸を研究した故・小野正人氏によると、道三は仙北市田沢湖卒田の生まれで、本名は竹内謙二。京都に上り、文政・天保期に京焼の名工・仁阿弥道八の門で修業を積んだとされている。その後、故郷秋田に戻り、寺内焼の磁器窯主として磁器の制作に携わった。道三の磁器窯主就任には、

ある事情があった。寺内焼は、白岩焼の分派である菅沢窯が1787(天明7)年に寺内(現秋田市)へ移転したこと(現秋田市)で開窯した。初めは陶器を主に生産していたが、文化年間以降、白磁染付の磁器が各地で普及し、時流に乗る形で1834(天保5)年〜55(安政2)年の間に磁器生産を本格化させた。京都修業の後、

当時既に見事な染付を焼いていた道三を高く評価した秋田藩は、この磁器窯の経営を任せたのである。しかし、事業は多額の負債を抱えて失敗に終わった。技巧に秀でた道三だったが、経営の才には恵まれなかったようだ。道三は窯主の座を降りた後、低火度の焼成に向けた窯があった八橋(現秋田市)に移り住んだ。八橋では80歳過ぎまで楽焼で生計を立てたとされている。

写真1の絵皿の高台には「寿楽道三」と記銘がある。長康亭や寿楽軒などの号は、自身の長寿を表しているのだろう。この作品は道三が八橋に移ってから、晩年に作ったものと考えられる。軽妙な筆致で描かれた唐人は、どこか枯れた趣が漂う。京焼の名匠の下で絵付けの技術を習得しながらも、窯の経営に失敗し失意のうちに八橋へと流れ着いた道三。唐人のどこか哀愁漂う姿に、道三の姿を重ねてみたくなる。

県立博物館では、人文展示室に道三の作品5点を展示している。秋田の陶芸に独自の足跡を残した道三の技と美を、ぜひこの機会に鑑賞してほしい。

(県立博物館学芸室主任・斎藤洋子)



写真1

長康亭道三作
「色絵花卉文唐人絵皿」
幅17㌘×高さ2.5㌘
(県立博物館蔵、右は高台)



長康亭道三作、左上から時計回りに「染付波千鳥茶入」(口径3.5㌘×高さ6.7㌘)、「色絵楽焼茶湯呑」(口径、高さ各7㌘)、「寺内焼 波に千鳥文茶碗」(口径10.5㌘×高さ4.9㌘)いずれも県立博物館蔵

写真2